

レバノンでの夏の活動報告

皆様のご協力に感謝します

パレスチナ子どものキャンペーンでは、ナハルエルバレド難民キャンプでの事態に対応するために、この夏、集中した支援体制を組みました。7月最初には、中村哲也と松原翔が現地に入り支援活動を開始しました。8月にはベイルートでソーシャルワーカーたちの研修を実施。立教大学の箕口雅博教授に専門家として参加してもらいました。また難民キャンプでのアート指導には上條陽子、中村安子、福島吉辰、三田村龍伸、福山茂、秋本悦男が参加しました。

● バダウィでの心理ケア

バダウィ難民キャンプでは、2006年から「ファミリーガイダンスセンター」という心理ケアの活動を開始していました。ナハルエルバレドの事件によって、家を失った、家族を失った、恐怖を体験した、将来への不安など、避難民の多くが、トラウマやストレスを抱え、センターには大変多くの方が来訪するようになりました。

精神科医のジャックさんは約600人を診察し、臨床心理士のジャックリーンさんは約700人のカウンセリングをしました。ファミリーガイダンスセンターは8月末までに、1600人以上を受け入れることができました。その半数は18歳以下です。

これだけの大人数に通常のスタッフでは対応しきれず、臨時で多くの専門家が必要となり、活動を維持するための資金が大幅に不足しました。キャンペーンでは、会員、支援者の皆さまからのご寄付と、立正佼成会一食平和基金からの助成を受け、3か月分の資金を提供して、全面的にこの活動を支えています。皆さまのご協力に心から感謝申し上げます。

● 子どものための活動

毎日午前と午後の2回、約3時間ずつ、子どものための活動を5月の終わりから8月いっぱいまで実施しました。遊び、ゲーム、音楽や踊り、ビデオ上映、演劇、人形劇、アートなど。毎回200人以上の子どもが参加していましたから、バダウィセンターの中は子どもたちでいっぱい。ボランティアの若者たちが真剣に子どもたちと向かい合い、大勢の子どもをうまくまとめている様子には感心しました。

● 歯科支援

避難してきた人も、受け入れ側のバダウィの住民たちも、非常なストレスを抱えています。こうしたストレスは心身症状となって現れ、歯の痛みを訴える人が大変に増えました。

バダウィの子どもセンターの歯科には、1か月で普段の1年と同じ数の患者が押し寄せています。バダウィの歯科は7年間キャンペーンが支援してきた事業です。ジハード医師と今年3月に来日した看護師のナディアさんだけでは治療が追いつかず、ナハルエルバレドで6月から診療を開始する予定だったマイアース医師（女性）も加わって、8月末までに3000人以上の患者を無料で診察しました。キャンペーンはこの歯科の緊急事態に対しても資金を提供し、支えています。

● 研修会の開催

キャンペーンが「子どもの家」と一緒に、難民キャンプで小学校低学年の子ども向けに補習クラスの事業を開始して3年以上が経過しました。現場で日常的に活動をしている指導員たちが抱える様々な問題を一緒に解決しようと、今年最初から予定していた研修会です。ナハルエルバレドの事件が起きましたが、予定通りに実施できました。

指導員たちは、アラビア語や算数、英語といった教科をどのように教えたらよいか？と頭を悩ませる一方で、難民キャンプの生活環境、家族問題、発達障がいや心理問題などを抱える子どもたちへの対応にも迷っています。こうした問題を一緒に考え、解決するために、専門家による講義やワークショップをバイルートで実施しました。レバノンの各地の難民キャンプから30名近いスタッフが参加。ナハルエルバレドのスタッフで避難民となってしまった4人も参加してくれたのは嬉しいことでした。箕口教授にもワークショップを分担してもらいました（8ページ参照）。

● アート指導

2000年から毎年夏にレバノンで実施してきた美術指導は、昨年は戦争のために中止になりました。今年も大変に厳しい状況でしたが、日数を短くして実施しました。シャティーラとブルジバラジネというバイルートの難民キャンプで3日間ずつ指導したほか、避難民で溢れるバダウィでも1日実施しました。たくさんの子どもが参加できて大喜びでした。



支援活動は終わりません —— 継続した活動と来日講演会に向けて

ナハルエルバレドの戦闘は終わりましたが、キャンプは廃墟になってしまいました。そして、残された大量の爆発物や地雷などの除去に時間がかかると見られています。その後でキャンプの再建が行われる予定ですが、それまでの間、35000人の住居をどのように確保するかという大きな問題があります。国連とNGOはレバノン政府と今後の計画を話し合っていますが、まだ正式な計画は発表されておらず、早くキャンプに戻りたいと願っている人々は焦燥感を強めています。当面、避難民の多くは今までどおりの仮住まいを強いられ、キャンプの周辺に建てられる予定のプレハブに住めるのは限られた家族になりそうです。

現在、イスラム世界はラマダン（断食月）の最中です。日中断食をするかわりに日没後にご馳走を食べる習慣がありますが、避難生活では調理することもままなりません。また収入をなくしていますから、断食明けのお祝いの準備も出来ない家庭がほとんどです。11月になると雨が多く冷たい冬が来ます。仮住まいが長引くにつれ、人々の疲労度は増し、不安は拡大することが予想されます。

現地では、今後もキャンプの心理ケアと歯科を分担することを国連から要請されています。また幼稚園や補習クラス、子どものためのアクティビティも継続します。ラマダン中には避難民を招いての食事会も予定しています。こうした活動のために、ご支援を継続してください。また、刺しゅう製品などの購入や販売にもご協力をお願いいたします。

なお、11月3日と4日には、パートナーNGOの「子どもの家」から代表のカセムさん、バダウィのセンター長で、自身も避難民のアブダッラーさん、「ファミリーガイダンスセンター」の臨床心理士のジャックリーンさんを日本に招いて大阪と東京で講演会を開催します。ぜひ、直接現地の様子をお聞きください。なお、この来日の経費について、航空券代など一部は国際交流基金から助成を受けていますが、その他の経費がかかります。来日のための賛同金も呼びかけていますので、こちらにもご協力ください。